今月のテーマ
アンシャンテ

田上市長のホッとトーク
～自らの思いを皆さんに語るコラム～

遠藤周作文学館は、遠藤周作先生の遺品や原稿などをご遺族から寄贈・寄託いただいて、平成12年に開館した文学館です。全国の候補地の中から、小説「沈黙」の舞台になった旧外海町が選ばれて、ここに建設されました。

今年の夏からは展示を一新。常設展示のコーナーは、遠藤先生の一生を、生誕から晩年まで分かりやすく紹介しています。

企画展示のコーナーも変わりました。新しいテーマは〝愛〟。遠藤文学の中に登場する人物を通して、遠藤先生が伝えたかった愛について紹介しています。ユニークなのは、遠藤先生が家族との間に交わした手紙も展示していることです。小説家としての遠藤周作と、一人の人間としての遠藤周作。その両面から、彼にとっての〝愛〟とは？ を考える、とても興味深い企画展示になっています。

＊　＊　＊

実は、今年の夏から変わったのはそれだけではありません。文学館の入り口にある、昨年の秋まで軽喫茶だった場所が、7月から「思索空間アンシャンテ」として生まれ変わりました。

「アンシャンテ」の名付け親は遠藤先生の妻の順子さん。フランス語で「はじめまして」という意味です。新しいアンシャンテの入り口には、順子さんの言葉が掲げられています。

『いつもは生活、生活と追われている人が、ちょっと生活から軸足を人生のほうにむけて、〝人生とは何か〟ということを考える場所になればと願っております』

この言葉を形にしたのが、「思索空間アンシャンテ」です。

＊　＊　＊

長崎には素敵な風景がたくさんあります。文学館から見える角力灘（すもうなだ）の風景もその一つ。アンシャンテの大きな窓から見える海と、空と、外海の集落の風景が織り成す景観は、まるで日替わりの絵のようです。いいえ、日替わりどころか、雲の形は刻々と変わり、私たちを飽きさせません。時折、その切れ間から海に日が射（さ）します。神様の世界と人間の世界をつなぐ道のようです。晴れた日には五島列島が見えることもあります。

でもアンシャンテの魅力は、外側の風景だけではありません。ゆっくり外の風景を見ながら、自分の心と向き合う。自分の内側の風景とも出会う場所なのです。

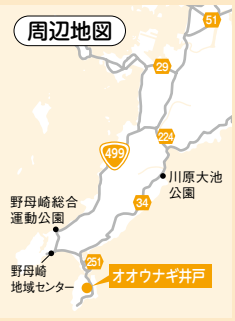
落ち着いた色合いの木を基調にした空間。遠藤作品の中の言葉が書かれたプレートが、さりげなく窓際に組み込まれています。言葉は月替わりで変わります。何カ所かに違ったデザインの椅子が置かれていて、好きな場所に座ることができます。

昼間は気付かないくらいさりげなく、「沈黙の声」を表現する光が天井から降りています。もちろん遠藤作品が並んだ本棚もあって、好きな本を読むことができます。入り口の近くにはコーヒーの自動販売機も置かれています。

長崎にまた一つ素敵な空間が生まれたことを、とてもうれしく思います。ぜひ一度訪ねてみてください。

外海の風景美を堪能しながら、思い思いのひと時を過ごしませんか。

出かけて見る・知るまちのオススメスポット
ながさきプチ旅行
地域に愛される 樺島のオオウナギ



昭和61年に赤い欄干の樺島大橋で脇岬町とつながった野母崎樺島町。

樺島バス停から歩いて約5分、住宅地の一角に、昔から体長2メートルにもなるオオウナギが住む古い共同井戸があります。この井戸はオオウナギの生息場所として世界の北限ともいわれ、大正12年、国の天然記念物に指定されました。

石積みの井戸沿いの海に注ぐ小川にはかつてウナギの稚魚が遡（さかのぼ）っており、オオウナギの稚魚は井戸の石積みの隙間から入ったものと考えられています。現在、2匹のオオウナギが井戸横の水槽で大切に飼育されています。

潮の香りと波の音が間近に感じられる野母崎樺島町。日頃の喧噪を忘れて、ゆったりと泳ぐオオウナギを見学に訪れてみてはいかがでしょうか。